

宗祖は、「惡爭^ヲ向^ヘ己^ニ妙事^ヲ与^ヘ他^ニ忘^レ己^ヲ利^ス他^ヲ慈悲の極^{ナリ}」(学生式全集一卷二頁)と述べている。四海同胞世界の平和は、かゝる大慈悲の道徳精神より生れるのである。宗祖の高唱した円頓菩薩戒は鎌倉時代以后に至り称名往生や唱題戒仏等の教が盛んに宣伝せられた影響を受けて、民間仏教からは殆んど忘れられてしまつた観があつたのである。然し乍ら人智の進歩に現代を淨化し救済するものは、此の眞俗一貫する一向大乗円頓の菩薩戒法門を除いては決して他にその類例はないものと思考するものである。

参考資料

- | | | | |
|-----------------|-----------|-----------------|------|
| 一、八宗綱要 | 冥然大徳 | 一、守護口界章 | 伝教大師 |
| 一、四分律 | 才五十八卷 | 一、山家学生式 | 全集一卷 |
| 一、大正藏经 | 一卷、二卷、廿三卷 | 一、雅阿含经 | |
| 一、戒体秘决(全集一卷、二卷) | | 一、北本涅槃经(聖行品による) | |

弥勒信仰興起背景の佛教思想

児 王 玄 太 郎

私は「弥勒信仰の起源」について研究を進めて行つたのでありますが、あまりにも広範囲にわたり過ぎましたため、こゝではその興起背景たる「佛教思想」について発表し諸兄の御指導を仰ぎたいと思つております。

弥勒信仰は初期大乘仏教信仰の一つであつて、釈迦仏から阿彌陀仏への信仰変遷の一過程である。換言すれば原始仏教から大乘仏教への変遷の過渡期中の信仰であり、これには淨土思想が包含されている。斯林に仏教の信仰発展に於て重要な地位を占めているのであるが、その根底たる弥勒についてはあまり知られていなかった。而るに近年になつて宇井博士^①が弥勒を次の三つに判然と區別されたのである。それは

一、仏弟子としての弥勒

二、信仰対象仏としての弥勒

三、論師としての弥勒

である。この中、仏弟子または論師としての弥勒は何れも史実実在人物であり、信仰対象仏としての弥勒は創造的、架空的存在である。しかしながら仏弟子としての弥勒すら当来仏としての予言のもとに置かれているので、その存在は明白ではない。

では次に弥勒信仰の研究に際して問題となる点を二、三列挙して以後論を進めて行こう。

1. 弥勒、阿逸多、慈氏の區別

今日迄殆んどの人が「弥勒は阿逸多の名であり、慈氏は弥勒の訳である」と云つていた。而るに弥勒と阿逸多が別人であることは既に古くから^②經典に説かれているところである。松本博士は「弥勒淨土論」^③に「弥勒の名称はアモイから来たのであつて、これは厚意友情、慈悲を意義する。アモイの語源を更に溯つて考えればアモイ（友の義）から来たものであろう。けれども弥勒の名称はその慈悲心に篤く、一切衆生を救済すると云う

ところから起つたものに相違ない」と云つておられる。これによつてもわかる通り、*Matreya* は *Mañit* から来たものであるから弥勒は慈氏とも呼ばれるのである。又阿逸多是 *Ajita* の訳であり、弥勒とは別人である。

2. 弥勒信仰の形式

弥勒信仰は二つの方面を持つておる。一は上生であつて、現在兜率天に於て説法されている弥勒菩薩への信仰である。二は下生であり、将来弥勒菩薩が此土に下生され、成仏されると云うことに基盤をおいてるのであつて、所謂弥勒仏への信仰である。今この両者を対照して見ると前者は現在菩薩^④への信仰であり、後者は未来仏への信仰であると云うことが明確にわかるのである。しかしこの両者は此世に於ける信仰であると云うところ共通点を見出すことが出来るのである。斯様に両者は平面的には釈明出来るのであるが、その興起の前後については釈明出来ない有様である。これは今後の研究を待たねばならない。

3. 弥勒信仰は此土に基盤を置いてゐる。

弥勒は此土の菩薩であつて、仏より当来仏としての記を授かり、一生補処の菩薩として現在兜率天にて説法しておられると云われている。やがて其処での修行が満ち足ると下生され、釈迦と同様に此土で修行され成仏されると信じられているのであつて、こゝに弥勒下生の信仰が興つたのである。これを見てわかれると思うのであるが、弥勒信仰は弥陀信仰のように完成したものではなく、未だ釈迦仏と共通した点が見られるのであり、未完成な状態にあることが知られよう。

以上弥勒信仰について基礎概念を記述したのであるが、私は斯様な観念から弥勒信仰の興起

背景なる仏教思想を眺めて行くのである。

三

弥勒信仰が大乗仏教信仰の一つであるということは前述の通りであるが、それは弥勒信仰が菩薩思想を基盤としており、その菩薩思想は大乗仏教の基盤であるからである。

仏教の大流は原始仏教から始まり部派仏教時代を経て大乗仏教に至った。木村博士^④によれば大乗仏教の理論的方面所謂思想は南印度に於て起り、俗信的方面所謂信仰は西北印度に於て起つたのであると云つておられる。前者は般若思想を意味するのであつて、南印度で起り西北印度で完成したのである。後者は俗信的に崇拜された菩薩観とこれより導かれた仏陀観を中心としたものである。この両者が一致して大成されたのが大乗仏教であり、現在ではその起源を西北印度に求めるのが一般の通説となつてゐる。

この大乗仏教は菩薩思想の上に成り立つたものであり、菩薩思想は上求菩提、下化衆生の誓願を基盤としてゐる。このような菩薩思想は仏陀観の発展に伴つて菩薩^①としての釈尊に対する考察が同時に発達し、遂に小乗仏教とは異つた菩薩観が成立したものと云えよう。小乗仏教に於ける菩薩観は釈迦のみを指したのであり、大乗仏教に於ては多くの人を云うのであり、こゝては仏道修行を積み成仏可能なるものを指すようになった。換言すれば菩薩思想は仏陀観、菩薩観が大乗系部派により発展させられ、大乗仏教思想の基盤となつたのであるが、これは既に部派仏教時代に入る前後に存してゐたのである。これが爾後、大乗系部派と小乗系部派の二系統により受容され、各々発展経過が異つたものである。

以上のように菩薩思想の発展に伴つて仏教も小乗仏教から大乗仏教へと成長したのであるが、

こゝに至るまでに種々の思想影響のあつたことを我々は見落してはならない。この中には当然
弥勒信仰の起源も包含されていると思うので、之等諸思想と信仰の流れを一望しなければなら
ぬ。

原始仏敎時代に於てはたゞ真身の仏としての釈迦仏のみ信仰したのであり、他仏を認めな
かつた。この当時としては未だ釈迦在世中のこと故、後代に見られるような超人的な存在ではな
かつたのであり、仏滅後に於てさえ釈迦仏と因縁にあるものゝ遺跡、足跡、塔、樹木、住居等
一仏から多仏へと増して来たのであるが、それに伴つて此土仏と彼土仏との区別も出来たので
ある。これについて先ずオーに過去仏思想をあげることが出来る。これの起源について松本博
士は仏滅後百五十年頃と云われているし、宮本博士は釈尊自身によつて説かれたものであると
と云つておられる。斯様に両博士はその所見を異にしてゐるのであるが、初期の聖典「阿
含聖」に説かれてゐるからとて釈尊自身説かれたものであるとは断言し難い。むしろ松本博士
の言の如く後代に作られたものと云えよう。阿含聖典に説かれた過去仏の本生は釈迦仏の本生
に殆んど類似している。これは明らかに仏敎思想が發展した結果生じたものと云えるだろうが
西尸三世前には一心の形態を整えていた。

次に過去仏思想に対して未來仏思想が考えられる。これも亦釈迦仏の本生にその源を発して
いると考えられるが、過去仏思想とはその性質が全然異つてゐる。この中に弥勒信仰も含まれ
てゐるのであり、弥勒の授記の例などは特に著しい。

以上述べ来つた過去仏も未來仏も此土仏である。而るに一方では「仏敎の世界形態説」^④によ

り、宇宙を小世界に分け一仏を存在せしめる多仏思想が起つて来た。之等の諸仏は彼土仏であり、そこに捧げられる崇拜の念は彼土仏信仰によつて表わされる。今此土仏と彼土仏を比較対照すると、前者は出生年代が記されており、各々はその本生を有しているが、後者はそれ等を有して、たゞ漠然と表わされているのみである。

さてオ三に往生思想を考えねばならない。釈尊在世当時仏敎思想と並行して上天思想が存していた。これを釈尊は成仏後敎化の方便として用いられたのであり、仏道修行者の方便ともされたのである。これが後に往生思想となつたと云われている。又これが多仏思想と相結んで西方淨土願生となつたものである。この場合は弥勒信仰よりは後代であるが、弥勒信仰と往生思想の関連性について考える必要が生じて来た。このことについても釈迦仏の本生が果している役割は大きなものである。所謂弥勒が釈尊から未來仏へ弥勒の場合は當來仏と云う方が適當であるが、この記を授かつて一生補処の位を得、こゝに弥勒は兜率天に住するようになつたと云われているのであり、これによつて兜率往生が弥勒信仰の本綱となつたのである。この當時は兜率天が最高の天界であつたと予想される。こゝで弥勒信仰に上生と下生の二つあるのがはつきりするのであるが、この何れも弥勒が一生補処の位を得て兜率天に住していると云うことから出発しているのである。

以上私は各々の思想を眺めて来たのであるが、弥勒信仰は一仏崇拜の原始仏敎時代から多仏崇拜の部派仏敎時代に至る間に起つて来たと云える。そしてこれは仏敎思想の発展と在家の心的欲求によつてその興起を見たのであり、特に此土仏、未來仏と云う奥が重視され、學者をして嘗ての弥勒信仰の方が弥勒信仰よりも広範圍にわたつていたと云わしめる原因もこゝにある。

と思うのである。

四

さて私はこの原稿を終るにあたり、「弥勒信仰の起源」についての限界をあげておこう。

(1) 部派仏教時代に萌芽し、西厂前後―西厂後三世頃と思われる。(仏教思想)

(2) 西北印度で起つたものだろう。

(3) 今のダルヂスタン(Dardistan)の弥勒像は西厂後二、三世紀頃には作られたと思われる。『仏国記』^⑩や『大唐西域記』^⑪の記事は疑わしい。

(4) スタイン(Stein)博士発掘(於千圓)の『弥勒下生圣』の奥書から西厂後一―三世紀頃の間と思われる。

(5) 初期弥勒圣訳者たる竺法護は三九九年から西域地方を遊厂して、弥勒圣を得たのである。しかし二二二年に入支した支謙にはその訳圣は見られない。これから推測すると西厂後二、三世紀頃と思われる。

以上の如く「弥勒信仰の起源」を推測出来るのであるが、その年代を決定するにはもつと確固たる証拠がなくてはならない。この確定は今後の研究に待たねばならない。

註

① 『印度哲学研究』卷一、三五五頁

② 五部四阿含圣中に種々見られる。

③ 同著 二二〇―二二二頁

④ 塚本博士著『支那仏教史の研究』(北魏篇五七一頁)「将来仏としての弥勒の説法にあ

わんとの信仰には、強い「この世界」「この人間生活」への愛着が認められる。

⑤ 大智度論 (㊦ 25. No. 1509. P. 21. 2. 中) 「慈氏妙德菩薩等。此出家菩薩。」

⑥ 同氏著 『印度哲学仏教思想史』 (二一六頁)

⑦ 宇井博士著 『聖典の成立とその伝統』 (四九頁)

⑧ 中阿含经才十三卷説本圣 (㊦ 1. No. 26. P. 510. B. 中) 「当有仏名弥勒如未無所著等正覺

明行成爲善遊世間解無上士道法御天人师号仏衆祐。猶如我今已成如未無所著等正覺明行成爲善遊世間解無上士道法御天人师号仏衆祐」とある。他圣にもよくあらわれる。

⑨ 三界説と須弥山説が部派仏教時代になつて完成されたのである。参考文献、宇井博士著

『印度哲学史』 (五五頁)

⑩ ㊦ 51. No. 2085. P. 857. C. E.

⑪ ㊦ 51. No. 2087. P. 884. B. 中.

⑫ 石浜純太郎著 『東洋学の話』 (一四六頁)

主なる註はつたが以下参考文献をあげる。

1. 『印度学仏教史』三卷。(一)(四六頁)

2. 〃 一卷。(二)(六三頁)

3. 〃 〃 (一五一頁)

4. 〃 三卷。(二)(一三四頁)

5. 〃 〃 (一)(四八頁)

6. 寺本婉雅訳註

『藏漢和三体合璧、仏説無量壽圣、仏説阿弥陀圣』 (二二頁)

7. 渡辺棋雄著 『小乘仏教』 (八四—一八六頁)

8. 小野玄妙著 『仏教の美術と厂史』 (六八頁)

9. 金倉円照著 『印度仏教史』 (二二五頁)

10. 逸見梅栄著 『美術思想』 (四二頁)

11. 赤沼智善著 『阿含之仏教』 以下略。